もう居ない・・・

martini

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もう居ない・・・

【Ｎコード】
Ｎ９５５０Ｅ

【作者名】
ｍａｒｔｉｎｉ

【あらすじ】
組織との戦いで出た、大きな代償。それは・・・工藤新一の‘死’だった・・・

第1話　安心して（前書き）

これは死にネタです。

苦手な方は読まないほうが無難です。

第1話　安心して

今日は、私の心とは正反対で、快晴だった。

私は、工藤君、ＦＢＩ、そしてＣＩＡのおかげで、無事、元の姿に戻ることができた。

それは、組織を潰せたことを意味する。

これで工藤君も元に戻れて、蘭さんのところに行き、喜びに満ちているはずだった。でも・・・

大きな代償ができてしまった。

その代償とは・・・

工藤君が、ジンに撃たれ、死んでしまったこと。

あれは、５週間前、アメリカで組織と戦っていた時の話・・・

私たちは、アメリカへと渡った。

アメリカに、組織のアジトがあるということが分かったらしい。

アジトを見つけ出した私たちは、ついに、あのお方、のいる部屋に着いた。

その場には、緊迫した空気が流れている。

赤井さんが、その部屋のドアを勢いよく開けた。

案の定、そこにはジン達がいた。

そして、話す間もなく銃撃戦が始まった。

私たちも、持っていた銃で応戦。

あと、残すはジンだけになった。

他の仲間は、皆、息はあるものの、動ける状態ではなかった。

ジンは、顔をしかめると、銃を撃った。

きっと、私が狙われたんだろうと思った。

考えた通り、弾(たま)は、私のほうに飛んでくる。

よけられない。そう思った。

私は、グッと目を瞑(つむ)った。

でも、いくら待っても痛みは体に走らない。

どうしたことかと目をあけると、目の前には工藤君が立っていた。

工藤君は、ゆっくりと倒れていく。

私は最初、わけが分からなかった。

どうして彼は、私をかばったのだろう？

私が消えるべきだったのに。

どうして彼が、消える立場に立ってしまったのだろう？

ジンは、工藤君を撃った後、周りを見渡した。

ジンは、もう逃げられないと悟ったのだろうか？

最後は自分の銃で、自分の頭を打ち抜き、自決した。

赤井さん、ジョディ先生、ジェームズさん以外の捜査官達は、ジン以外の組織の仲間を連行していった。

私たちは、工藤君の元に駆け寄った。

でも、工藤君はもう、虫の息だった。

私は、ギュッと工藤君の手を握った。

死んでほしくなかったから。

工藤君は、私にこう言った。

『俺・・・もうあの世行きかな・・・でもよ、灰原・・・俺、後悔はしてないぜ・・・死ぬ前に・・・組織を・・・潰せたんだから・・・灰原・・・俺、言ったよな？『自分の運命から逃げるな』って・・・俺、こうなる運命だったんなら・・・しょうがないと思うぜ・・・お前は・・・俺の分まで生きろ・・・宮野志保に・・・戻れ・・・宮野志保の姿でも・・・お前を・・・待ってくれてる人がいるはずだから・・・俺は・・・工藤新一は・・・死んだと・・・両親や、蘭たちに伝えてくれ・・・』

私は涙で目の前がぼやけた。

『いやよ！まだ間に合うわ！今救急車を呼ぶから・・・！』

携帯を取り出し、救急車を呼ぼうとする手を、工藤君が止めた。

『どうして止めるのよ！まだ、間に合うから・・・私・・・どうしても助けたいのよ！！』

そう言っても、工藤君は手を放してはくれなかった。

『もう手遅れだ・・・病院で死ぬぐらいなら・・・組織を・・・奴らを倒したこの場所で・・・死にたいんだ・・・』

少しずつ、工藤君の息が小さくなっていく。

『俺の正体・・・皆にばらしてくれ・・・自分の口で言えないのは残念だけど・・・お前なら・・・できるだろ・・・？』

私にはそんなこと、できない。

できるわけないじゃない。

『また、私のせいで人が死んでいくの・・・？いやよ、そんなの！蘭さんたちにはどういうのよ？！ずっと待っててくれたのよ？！』

『それは悪いと思ってる・・・でも・・・こんなに血が出てて・・・生きれると思うか・・・？』

それもそうだった。

ここから病院までは、近くても２Ｋｍは先にある。

間に合いそうもない。

『笑えよ、灰原・・・あの世の土産(みやげ)にするんだからよ・・・』

『え・・・？』

『明美さんに・・・『宮野志保は元気だ。』って伝えてやりたいんだ・・・そしたら、明美さん、また安心して眠れるだろ・・・？』

工藤君は必死に、目を開けて私たちに伝えていく。

『工藤君・・・いや、いやよ・・・死なないで！生きて！生きることを・・・諦めないで！』

『灰原・・・俺のあと、追うなよ・・・？死のうなんて・・・馬鹿なまね・・・は・・・やめ・・・ろ・・・分か・・・ったな・・・・？』

工藤君の目が、少しずつ閉じられていく。

そして、完全に目を閉じてしまった・・・

『工藤君・・・？そんな・・・いや、いやよ・・・いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！』

私は、泣き叫んだ。

涙が枯れ果てるまで。

『クールキッド・・・コナン君・・・・！』

赤井さんと、ジェームズさんは泣かなかった。

ジェームズさんは、あとあとには泣いてしまったけれど。

赤井さんは、決して涙を見せなかった。

私たちは、病院で死亡が確定されると、その遺体を日本に持っていくことにした・・・

日本につき、私たちは蘭さんたち事情を伝えた。

ＦＢＩは、組織について。

政府に極秘で、日本に潜入捜査をしていたことについて。

私は、工藤君のことと、正体、そして私の正体を言った。

蘭さんは、ワアッと泣き崩れてしまった。

吉田さんたちも、泣いている。

私たちは、声をそろえていった。

『我々（私たち）のせいで、こんなことになってしまい・・・申し訳ございませんでした！』

ジョディ先生、ジェームズさん、そして私は泣いていた。

赤井さんは、泣いていなかった。

すると、毛利さんが赤井さんの胸元をガッとつかんだ。

「お前、申し訳ございませんでした、で済むと思ってるのか？！てめえらがコナンを守らねえから、死んじまったんじゃねえか！！済むのかよ、謝っただけでよ！！」

赤井さんは、黙ったままだった。

ただ黙って、下を向いているだけ。

「もうやめて、お父さん！殺した人は、自分で自決したって言ったじゃない！コナン君がいつかそうなることだって、分かってたことでしょ？！」

蘭さんの言葉で、毛利さんは赤井さんから手を離した。

赤井さんは、下を向いたままの状態だった。

赤井さんは、涙を見せたくなかったのだろうか？

「ジョディ・・・ジェームズ・・・あとは頼んだ・・・ぞ・・・・」

それだけ言うと、バッと走っていった。

走っていったとき、光る液体がとんだ。

そう。赤井さんの涙だった。

そこには、重々しい空気しか、残されていなかった・・・

あれから5週間経った今でも、工藤君のことを思い出す。

工藤君。あなたは幸せでしたか？

お姉ちゃんに、伝えてくれましたか？

私は大丈夫。

あなたに心配されないように生きます。

だから・・・安心して眠ってね・・・？

『バーロー。俺は今までにないくらい安心して眠ってるっての・・・』

どこからか、工藤君の声が聞こえたような気がした。

ありがとう、工藤君・・・

第1話　安心して（後書き）

死にネタなんか書いて、すみません。

哀ちゃん1人称で、とことん暗いです。

コナン君ファンの方、すみません。

第2話　いつか

コナン君が死んでから、もう5週間がたったのね・・・

私は、部屋の窓から夜の夜景を見ている。

コナン君が死んでしまったあの日から、ＦＢＩの私たちは、アメリカには帰れないと思った。

幼い子供の命を奪ってしまったから。

本当は工藤新一だったらしいけど、まだ二十歳にもなってなかった子。

その子の命を奪っておきながら、アメリカに帰ったら、『逃げた』って言われるはず。

コナン君は日本にいる。

だったら私たちも日本に。

これが、私たちができる、精一杯の償(つぐな)い。

アメリカに行く日、私たちは確かに止めた。

でも、コナン君の言葉に心を動かされ、行かせてしまった。

その言葉は、こうだった。

『僕はどうしても、組織を倒したいんだ！僕の人生も、めちゃくちゃにされたから！せめて、組織を倒したい！そうじゃないと、死んだ皆が救われないから！！』

『コナン君をアメリカに連れていく。』

その選択が、コナン君を死なせてしまった。

行かせなければ、安全だったのに。

コナン君が死んでから、激しく後悔した。

連れてこなきゃよかった、と・・・

私たちは結局、誰を守れたって言うのだろう。

だれも守れなかった。せめて子供だけでも、守りたかった。

どうして、私たちＦＢＩじゃなかったんだろう？

そしたら、コナン君は死ななかった。

どうして・・・？

どうしてあの時、体が動かなかったの？

そうすれば、守れたのに。

どうして？どうして？

何回自問自答をしても、答えは見つからない。

私は、自分が嫌になった。

何もできない自分が。

ただ黙って、コナン君が死ぬのを見ていた自分が。

どうしたらいいんだろう？

この気持ちを、どこにしまえばいいのだろう？

分からなかった。

哀ちゃんをかばって死んでしまった彼。

「コナン君・・・いえ、クールキッド・・・あなたはよくやったわ・・・ありがとう・・・」

本当によく頑張ってくれたわね、コナン君・・・

コナン君・・・あなたは幸せですか？

安らかに、眠ってね・・・コナン君？

私たちはいつか、ちゃんと立ち直るからね・・・？

『その日が早く来ることを願ってるよ、ジョディ先生・・・ありがとう・・・』

どこからなのかしら・・・？コナン君の声がしたような気がした。

ありがとうね、コナン君。

組織を倒すのを手助けしてくれて。

今まで、本当にありがとう・・・

クールキッド・・・

第2話　いつか（後書き）

またまたシリアス！

ホント、最初がシリアスなら続きもシリアスって感じですよね。

ちなみに私、小学生です。

小学生でもありますが、頑張ります！

第3話　居場所

5週間前に、ボウヤが死んだ。

最初、俺はわけが分からなかった。

居候先(いそうろうさき)や、両親、そしてボウヤに関わっている人たち、全員に事実を伝えた。

毛利小五郎に、言われた言葉が、頭の中を駆け抜けていく。

『申し訳ございませんでした、で済むと思ってるのか?!』

済むだなんて思ってない。

じゃあ、どうすればいいんだ?

分からない。

そう言われたあと、俺は涙を見せたくなくてその場から逃げだした。

５週間経ち、俺は未(いま)だにジョディたちには会っていない。

アメリカに帰れない。

ＦＢＩの皆の所にも帰れない。

じゃあ・・・俺の居場所はいったい、どこにある？

ボウヤ・・・君なら分かるのか？

俺の居場所がどこか、分かるのか？

分かるのなら、教えてくれ。

もう、耐えられないから・・・

ボウヤ・・・ボウヤ・・・！

俺は目の前が涙でぼやけていることに気が付いた。

ボウヤを守れなかったのも、俺。

体が動かなかったのも、事実。

あの時体が動いていれば・・・ボウヤは助かった。

動かなかったのは、一瞬の事だったから？

これは、理由になるのだろうか？

全然頭が働かない。

また目の前が涙でぼやけていく。

何で俺じゃなかったんだ？

俺だったらよかったのに・・・！

ボウヤは動いたのに・・・何で俺は動かなかったんだ？！

俺はそんなに憶病(おくびょう)だったのか?!

何で・・・何で!!

俺が自分の手を強く握っていたその時。

そっと誰かが手を握ったような気がした。

でも、手を見ても、どこにも手なんかない。

俺はとうとう、感覚がなくなってきたのか?

俺は苦笑いを顔に浮かべた。

『赤井さんの居場所は、すぐ近くにあるじゃない・・・ジョディ先生たちのところがさ・・・人はそんなとき、すぐには動けないものなんだよ・・・僕が体を動かせたのは、失いたくなかったから・・・分かるでしょ?赤井さんなら。いつか、ちゃんと立ち直ってね・・・』

ボウヤが、俺に話しかけてるれたような気がした。

どこからかは分からなかった。でも、すごく勇気づけられた。

俺の居場所は・・・FBI・・・

・・・会いに行こう、ジョディたちに。

ありがとうな、ボウヤ・・・

君こそが、組織の恐れた、銀の弾丸(シルバーブレッド)だ・・・

本当に、ありがとう・・・

銀の弾丸(シルバーブレッド)・・・

第3話　居場所（後書き）

すみません。

最後のほうに、銀の弾丸とありましたよね？

なんか『弾丸』だけでシルバーブレッドって感じで・・・

なんかそうなったんです。

分かっているでしょうが、『銀の弾丸』で、シルバーブレッドですので。

すみません・・・（泣）

第4話　限界

5週間前、アメリカでコナン君が死んだ。

私は、コナン君を死なせてしまった。

コナン君は、重々承知(じゅうじゅうしょうち)で、アメリカに行くといった。

その時、どうして止めなかったのだろう？

こんな結果になると分かっていれば、連れていかなかった。

未来は分からない。でも、最悪の事態の事まで考えていなかった私も、悪い。

きっとコナン君は、行ったら死ぬと分かっていたのだろう。

それでも、組織を倒したい。消したいという思いが強かったんだ。

だから、死んででも行きたいと思ったんだと思う。

・・・これでは、ＦＢＩも形無しだな。

『申し訳ございませんでした、で済むと思ってるのか?!』

済まないことだというのは分かっている。

どうしたらいいのか、分からないんだ。

誰が分かるのだろう?

分かる人がいるなら、教えてくれないか?

もう、限界だ・・・

・・・どうして、私じゃなかったのだろう?

私なら、大丈夫だったかもしれないのに。

どうして?なぜ?

・・・分からない。

急に、またコナン君に謝りたくなった。

コナン君・・・すまない。

助けてやれなかった。

あの女の子が、君と話しているときに、救急車を手配していれば、君は助かったかもしれないのに。

本当に・・・すまない。

何回謝っても、もう、私の声は君には届かないんだな・・・

届かなくても、謝りたい・・・

すまなかった・・・

私は、うつむいて泣いてしまった。

その時、誰かが涙を拭いてくれたような気がした。

顔を触ると、さっきまで流れていた涙がない。

いったい誰が・・・？

『ジェームズさん・・・自分を責めちゃダメだよ・・・？それに僕、組織を倒したあの場所で死ねて、すごくうれしかった。死ぬならあの場所がよかったんだ。だから自分を責めないで、ジェームズさん。どうしようと、誰かが死ぬ結果になっていたんだから・・・』

コナン君・・・？

どこかは分からなかったが、声はコナン君の声だった。

空耳かもしれないけれど、すごく勇気づけられた。

ありがとう、コナン君・・・

君が私たちと一緒にいてくれたから、あそこまで組織を追い詰めら

れたんだよ。

本当にありがとう、コナン君。そして、さようなら・・・

クールガイ・・・

第４話　限界（後書き）

なんか、『？？の思い・・・』しか題名にありませんね・・・

題名が思い浮かばないものでして・・・

このあと、蘭や小五郎、少年探偵団なども登場します。

少年探偵団も、ちゃんと、歩美、元太、光彦と別れていますから、ご安心を。

最後のほうにはコナン登場の予定も・・・

まぁ、楽しみにしててください。

第5話　気付けなかった

コナン君・・・ううん、新一が死んでから、5週間が経った。

あたしは、自分の部屋にいる。

部屋を真っ暗にして。

5週間経った今でも、新一といた日々が頭の中を駆け巡っていく。

私たちは、アメリカに行く理由を、こう聞いていた。

電話で聞いてんだけれども。

『町で、お父さんとお母さんに会ったんだ。明日、お父さんたちと一緒にアメリカに行くんだけど、いい？』

私は、すかさず即答した。

『良いに決まってるじゃない！久しぶりに会ったんでしょ？いけないなんて言わないわ。じゃあ思いっきり遊んでらっしゃい。』

『・・・うん。ありがと。』

『どうしたの？嬉(うれ)しくないの？』

『う、嬉しいよ！じゃあそろそろ。じゃあ帰ってきたときに会おうね！』

『ええ！じゃあ遊んでらっしゃい！』

あの日が、新一の声を聞く最後の日だった。

どうしてあの時、不審に思わなかったのだろう？

『どうして、一瞬黙ったの？』

そう聞けばよかったのに。

あたしは馬鹿だ。

新一の、精一杯のＳＯＳを見逃すなんて。

きっと新一は、頭では理解してても、心までは追いついていなかったはず。

だから、せめてあたしには気づいてほしかったから、一回黙ったんだと思う。

なのに、あたしはそれに気がつかなかった。

『どうしたの？うれしくないの？』

その言葉を聞いて、無理矢理（むりやり）笑っているような声で、『嬉しいよ！』って言ったんだ。

あたしは・・・長い間新一といたのに、新一のＳＯＳに気がつかなかった。

もし気づいてあげていれば、新一は日本に残ったんじゃないかな？

でも・・・もう遅い。

死んでしまってから後悔したって、意味がない。

せめて、新一が初七日に、帰ってきてくれたら・・・どんなに嬉しかったか。

でも・・・そんな話、迷信じゃない。

誰よ・・・こんな迷信を作ったのは。

少しばかり期待してたのに、裏切って。

皆、来てくれたらって思って、ドキドキして待ってたのよ？

こんな事をしたのが神様なら・・・あたしは神様を恨みます。

新一の運命をこんなにした、あなたを。

でも・・・あたしの我儘（わがまま）を聞いてください、神様・・・

後もう一回でいいです。新一に会わせてください。

お願いします、神様・・・！

あたしは、泣き崩れた。

暗闇の中で、声を殺して泣いていた。

すると、あたしを後ろから、誰かが抱きしめてくれた感じがした。

びっくりして後ろを向いた。でも、誰もいない。

気のせいかな・・・？とうとうあたしは、感覚が狂ったのかな？

『蘭・・・確かに俺は、お前にＳＯＳを送った。でも、気付かないのは当たり前。だから・・・自分を責めるな。お前は悪くない。だから・・・泣くなよ、蘭・・・なっ？笑えって。笑えば幸福がやってくるぜ？ほらっ、『笑う門には福来たる』って言うだろ？・・・笑えよ、蘭・・・じゃねえと、こっち悲しくなっちまう・・・なっ？』

どこからか・・・新一の声が聞こえてきた。

すごく嬉しかった。

新一の声が聞けたから。

ありがとね。

今まであたしを支えてくれて。

ありがとう、コナン君・・・

そして・・・さようなら。

新一・・・

第5話　気付けなかった（後書き）

今度は蘭ちゃん！こんな感じかなぁ～って思いながら書きました。

次は、小五郎の予定です。

妃先生は出てこないので、あらかじめご了承ください。

あと、メッセージなどを送ってくださるとうれしいです。

メッセージなど、宜しくお願いしま～す。

第6話　分かってた

コナンが死んで、５週間か・・・

俺はぼんやりと、事務所から外を眺めている。

俺は、ＦＢＩと、あの子供の話を聞いて、カッときた。

みすみす目の前で見殺しにしたのか、と。

でも、冷静に考えると、しょうがないことだったんじゃないか、と思った。

カッとなったときに、あのニット帽の男に言った言葉。

『お前、申し訳ございませんでした、で済むと思ってるのか？！てめえらがコナンを守らねえから、死んじまったんじゃねえか！済むのかよ、謝っただけでよ！』

皆、分かってたはずだ。

謝っただけで済まないということが。

なのに、俺は、皆を困らせることを言っちまった。

『もうやめて、お父さん！殺した人は、自分で自決したって言うじゃない！コナン君がいつかそうなることだって、分かってたことでしょ？！』

分かってることだった。

コナンは、いつも危険な場所にも行く。

それが死ぬかもしれないことでも、犯人を捕まえる事なら、危険を顧(かえり)みず、その場所へ向かう。

何回叱っても、直そうとしない。

そういう子供なんだって思ってた。

いつ、死んでしまうのかも分からない子供。

分かってたはずなのに・・・

俺は、結局何もできなかった。

じゃあ、ＦＢＩの奴らと一緒じゃねえか。

守ることも、その場で励ますこともできなかったじゃねえか。

そんな俺が、大口叩くことなんか、できない。

あれじゃ、ただの八つ当たりだ。

あのニット帽の男に、謝りたい。

でも、聞いた話じゃ、どこにいるのかも分からないらしい。

皆、まだ表情は暗いけど・・・

いつか、立ち直るよな？

・・・なぁ、コナン・・・

お前、今、幸せなのか？

俺の願いは、お前が幸せだったらいい。

それだけだ。

だから、幸せになってくれよ、コナン・・・

『今、すごく幸せだよ、おじさん。だから、心配しなくていいからね・・・今まで、本当にありがとう・・・』

どこからか、コナンの声が聞こえた。

今まで、本当にありがとう。

そして・・・さようなら。

コナン・・・

第6話　分かってた（後書き）

こんな感じでしょうか・・・？

全然わかりません。適当です。

すみません・・・

次は・・・歩美ちゃんにしようかな、とか思ってます。

まぁ、変わる可能性もあり、ですので。

メッセージなどを送ってくださるとうれしいです。

お願いします。

第7話　大好きだよ

コナン君が死んじゃって、5週間かぁ・・・

あたしは、ボーっとコナン君の机を眺めてる。

本当は、死んだその日に燃やそうって言ってたんだけど、歩美が

『5週間ぐらい、置いとこうよ。コナン君と一緒に勉強してるって思えて、いいでしょ？』

って提案したから、5週間経った今でも残ってる。

明日、コナン君の机を燃やすことになってる。

コナン君の机を置いときたかったのは、コナン君の机を、見ときたかったから。

机があると、コナン君がまだそこに座ってるんじゃないかって思うの。

コナン君の姿が見えたらいいなぁって思うけど、見えたら見えたで怖いよね。

そう考えてるだけでも、幸せなんだぁ。でも・・・

歩美ね、コナン君の事が大好きだった。

すごく優しくて、格好よかったから。

でも・・・もう言えない。

『好きだよ。』

って、もう言えない。

こんなことになるぐらいなら・・・早めに告白しとけばよかった。

フられても、自分の気持ちを伝えればよかった。

大好きだよって、伝えればよかった。

でも・・・後悔しても、もう遅いよね。

だって、もう居ないんだもん。

そばにいてくれたらって思うけど、見えないから分からない。

だから、今も自分の中で信じてる。

コナン君が、近くで見守ってくれてることを。

「ん・・・ちゃん・・・歩美ちゃん！」

えっ？

「先生に指されてますよ！」

「あっ・・・ごめんなさい、聞いてなかった・・・」

「もう。じゃあ、元太君！」

よかった、怒られなくて。

コナン君が、守ってくれたのかな？

そう思うと、なんだかすごく心が軽くなった。

ねえ、コナン君。

歩美は、コナン君のことが大好き！

もう届かないとしても・・・告白するね。

今まで大好きでした。

この告白・・・コナン君に、届いてほしいなぁ・・・

『その気持ちは凄く嬉しいよ。でも、いつまでも引きずっちゃダメだからね。また、新しい男の人を見つけなよ。ねっ？』

「こ、コナン君？！」

あたしが、急に大声出して立ったから、皆、目がテン。

「あっ、ごめんなさい・・・コナン君の声が聞こえたような気がしたから・・・ごめんなさい。」

恥ずかしかった・・・でも。

コナン君の声が聞けてよかったぁ。

ありがとっ。

そして・・・さよならっ。

コナン君!

歩美はずーっと・・・

コナン君のことが大好きだよ!

第7話　大好きだよ（後書き）

ふう。なんとかできました。

次は・・・誰にしましょうか。

元太君・・・かな？

でも、難しそうだなぁ。

でも、とりあえず頑張ります。

第8話　大丈夫

コナンが死んで、５週間がたったんだなぁ。

俺は、ボーっと授業の話を聞いている。

でも、やっぱりコナンがいないとなると勉強がはかどらない。

いつもなら、コナンを目標に頑張ってた。

けど、その目標はもう居ない。

あの世ってとこに行ったんだよな。

少年探偵団の仲間だったコナン。

俺が自称で少年探偵団団長をやってた。

でも、心の中では、コナンが団長にふさわしい思った。

でも、何でか言いずらくて、なかなか素直に言えない。

でも、コナンはうすうす感づいてるようだった。

そんなコナンは、少し子供離れしてる。

大人っぽいし、たくさん知識持ってるし。

とても、小学生には思えなかった。

でも、灰原たちから聞いて、やっとわかった。

高校生なんだって。

だから、あんなに大人っぽかったんだって。

ＡＰＴＸ・・・なんだっけ？

なんかそんな薬で体が縮んだって言ってたな・・・

この世にそんな薬があるなんて、思ってもなかった。

そのコナンに、いろいろなことを教(おそ)わった。

探偵のこととか、これは、・・・って言う法に、違反してるとか。

いろいろなことを教えてくれた。

将来、俺達が探偵や、警察関係者になれるようにだってさ。

俺達、少年探偵団だもんな。

俺は、警察関係者になって、コナンを驚かせるのが夢だったんだ。

いろいろな事件に巻き込まれる俺達は、たまに、過ちを犯す。

でも、コナンは笑ってた。

俺がすごい過ちを犯しても、笑って

『大丈夫だって。』

って言ってくれた。

あんなにやさしくできる男の子なんて、そこらへんにはいねえと思う。

すごいなぁって尊敬(そんけい)してた。

高校生だから、小学生の問題も簡単。

学年トップだった。

音楽を除いてだけどな。

すごい音痴だった。

でも、すごくコナンらしいと思ったんだ。

俺、いっぱい勉強して、コナンに褒(ほ)めてもらおうって思ってたんだ。

なのに、あいつは、もう居ない。

どんなに教えても、届かない。

なぁ、コナン。

俺、結構頑張ってるよな？

将来、探偵とか、警察関係者になれるよな？

なぁ？コナン。

『ああ、なれるさ。お前たちならきっと。そんな気が弱くてどうするんだよ？もっとシャキッとしろよ。なっ？少年探偵団団長さん？』

え・・・？

今、確かにコナンの声が・・・

もしかして、コナンの奴・・・

俺達が心配で見に来てくれたのか？

それだったら、安心させてやらねえと。

コナン！俺達は大丈夫だから、心配するなよ！

もう、コナンの声は聞こえなかった。

でも、きっと聞いてくれてたと思う。

ありがとう、見に来てくれて。

お前が本当の、少年探偵団団長だぜ。

そして・・・さようなら。

コナン・・・

第8話　大丈夫（後書き）

終わった！結構難しかったです・・・

で、次が光彦です。

そして、その次は・・・おおっと。これ以上はお楽しみ。

次の話も、ぜひ、読んでくださいね～。

あと、メッセージもお願いします！

第9話　悪くない

「この問題は、・・・って言うこと。分かったかなー？」

先生の声が教室に響いてます。

今日は、灰原さんがお休みです。

どうやら、自分のせいでコナン君が死んだと思って、自分を責めてるんだと思います。

僕は、コナン君に何も言ってやれませんでした。

傍（そば）にいることもできませんでした。

親に久しぶりに会って、アメリカに行くという理由は、嘘だったんですね。

僕たちは、言ったあとのコナン君の表情が少し変わったのを、気付くことができませんでした。

コナン君が死んだと聞かされたあと、思いだしたんです。

『親に久しぶりに会ったんだよ。それで、親子水入らずで、アメリカに行くことにしたんだ。久しぶりだったからさ、すっげー嬉しかったんだよな。まぁそう言うこと。頼んだぜ。』

『任せろ！』

元太君がそう言ったあと、コナン君の表情が変わったんです。

淋(さみ)しげで、悲しげで、まるで行きたくないんだって訴(うった)えてるようでした。

『どうしたの？コナン君。』

歩美ちゃんが心配そうにコナン君の顔を見ます。

その時、コナン君は、無理矢理笑顔を作ってるようでした。

『い、いや、長い間、オメーらに会えねえんだなぁ、て思ってたんだよ。』

灰原さんは、少し考えてるようでした。

コナン君が席に戻ると、灰原さんは、コナン君に何やら言っていました。

何かは、僕の席からじゃ遠すぎて、聞こえませんでした。

そして、授業に入ったんです。

歩美ちゃんから聞いた話では、灰原さんたちは、こう会話していたそうです。

『く・・・いえ、聞こえたらまずいから、江戸川君ね。江戸川君。アメリカに行くのってもしかして・・・‘奴等（やつら）’の事でなの？』

『いや、親に会って、久しぶりにアメリカの別荘に行こう、って言われたんだ。まぁ、行きたかったしなぁ、とか思って、ＯＫしたんだよ。』

『それだったらいいけど・・・』

‘奴等’って誰でしょう？

初めは歩美ちゃんも、僕も分かりませんでした。

コナン君が帰ってきてから聞こうと思ったんです。

灰原さんは、忙しそうでしたから。

でも、帰ってくるなり、コナン君が死んだと聞かされました。

そして、‘奴等’というのは、アメリカの本部にあった組織のことだと知らされました。

灰原さんも、ああは言っていたものの、やはり組織の人たちとの関連の考えたらしく、こっそりついていったみたいです。

案の定、組織との関連があったと。

それで、コナン君は灰原さんを連れていくことになったらしいです。

でも、それは間違いだったと言ってました。

灰原さんは、自分を責めてました。

学校でも。

『私がついていったから・・・工藤君は死んでしまったのよ・・・』

いつもそう言っていました。

1週間は、灰原さんも来てました。

でも、4週間前から学校に来てません。

皆、心配していますけど、行ってもふさぎこんでしまうだけだと思うので、顔も会わせれません。

コナン君・・・コナン君は、いろんな人が悲しむのが、分かっていたんでしょう？

でも、終わらせなければならなかったんですよね？

だったら、コナン君は悪くないですよ。

最後に、ちゃんと夢を叶えたんですから。

『お前が初めてだよ、俺を悪くないって言ってくれたの。ありがとな、光彦・・・勉強、頑張れよ・・・』

コナン君・・・ですね。

ありがとうございます。

コナン君に安心してもらえるように、勉強、頑張りますね。

今まで、ありがとうございました・・・

コナン君・・・

第9話　悪くない（後書き）

終わったー！

なんか、おかしな文もあると思いますが、まぁ許してください。

そうそう。警察の皆さんは出てこないので。

出したら、だいぶ長くなると思うので。

そして！お次は・・・ひ・み・つ！です。

読んだら分かると思うので、続きも読んでください。

もしかしたら、続きがあるかも知れませんよ・・・

この続きの連載小説、ある可能性、大です。

メッセージなども宜しくお願いします。

第１０話　生まれ変われたら

皆・・・自分が守らなかったからとか、傍(そば)にいてやれなかったとか、後悔ばっかだな・・・

まぁ、しょうがねえか・・・

俺は、組織を倒せただけでも幸せだってのに・・・

この声は、もう届かねえよな。でも、言いたい。

灰原・・・明美さんに言っといたぜ。

『宮野志保は元気です。』って。

明美さん、泣いて喜んでた。

これで、いいだろ？ちゃんと土産(みやげ)にもなってるし。

なぁ？灰原・・・

でもよ・・・蘭も、おっちゃんも、歩美も、元太も、光彦も、灰原も、ジョディ先生も、赤井さんも、ジェイムズさんも、皆、笑ってくれよ・・・

じゃねえと・・・こっちまで悲しくなるじゃねえか・・・

泣かなくていいから・・・頼むから・・・

「コナン君・・・いえ、新一君・・・」

「あ、明美さん！」

明美さんが俺の後ろに立っていた。

「皆に・・・会いましょう？あなたが会いに行ってあげて。会えば、きっと皆笑ってくれるわ。ねっ？」

会いに・・・いく・・・

「あたしが誘導するわ。皆を。だから、ねっ？」

「・・・おう！会いに行くぜ！」

「じゃあ・・・行ってらっしゃい！」

その瞬間。俺は光に包まれた・・・

ん？ここは・・・

うわっ。皆来てる

蘭に、おっちゃんに、歩美に元太に光彦に灰原に、ジョディ先生た

ちまで！

明美さん、流石（さすが）！

で、俺は今、物陰（ものかげ）にいる・・・

「あの声・・・ここからよね？」

「まさか・・・幽霊とか？！」

「いやあ！幽霊嫌い！」

俺は幽霊だけど・・・

話しかけなくちゃ・・・

「皆！」

俺が声を上げると、皆、目をテンにして固まってしまった。

「こ、コナン君・・・？」

「・・・ああ。俺だよ、江戸川コナン。いや、工藤新一・・・のほうがいいか・・・」

「し、新一ぃ～！！」

「わっ！抱きつくなよ、蘭・・・」

「来てくれたんだ、来てくれたんだね！ひっくっ！」

蘭の奴・・・もう泣いてやがる。

泣くなよ・・・

「俺が・・・この世に来たのは・・・皆が泣いてて、心が苦しいから。俺まで・・・悲しくなっちまうから・・・頼むよ、泣かないでくれ。・・・」

これが、俺の本音だった。

「新一が望むなら・・・泣かない！新一のことで泣かないよ！」

そっか・・・それを聞いて安心したぜ。

「ありがとよ・・・じゃあそろそろ行くな・・・」

「もう・・・行くのか・・・？」

声を出したのは、赤井さんだった。

赤井さんは、無意識だったらしく、バッと口をつぐんだ。

「おう・・・ごめんな、俺にも時間がないから・・・」

その言葉を聞いて、皆はまた暗い顔になった。

「もし・・・生まれ変わったら・・・また、皆と一緒にいたいな・・・」

「コナン君！生まれ変わったら真っ先に歩美たちのところに来てよ！」

まっさきにって・・・無理無理。

でも、安心させねえと。

「うん。絶対に歩美ちゃん達のところに行くよ。」

皆、安心したみてえだ。

よかった・・・

「じゃあ・・・さよなら!!生まれ変わったときに会おうぜ!!」

俺は、そう言って消えた。

蘭たちの顔は、笑顔が浮かんでいた・・・

皆・・・もう泣いてねえな・・・

・・・なあ、神様・・・

もし、聞こえているなら・・・俺の願いをかなえてください。

性別は、女でも男でもいいです。

どうか・・・俺を生まれ変わらせてください。

お願いします。それ以外は望みません。

どうか、俺の願いを叶えてください。

これが、最後の・・・お願いです・・・

生まれ変われなかったら・・・ごめんな、皆・・・

その時は・・・さようなら・・・

ありがとう、皆・・・

第１０話　生まれ変われたら（後書き）

題名でわかりますよね？

これは、コナン君でーす！

一応、これで終わります。

続きは、また連載小説を作って、書きますので。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9550e/

もう居ない・・・

2010年12月8日09時43分発行